

## 宝物故事から見た「包公案」の作品構造

阿部, 泰記  
山口大学人文学部教授 : 中国古典文学

<https://doi.org/10.15017/9635>

---

出版情報 : 中国文学論集. 28, pp. 35-50, 1999-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 宝物故事から見た「包公案」の作品構造

阿部泰記

## 一 序

民間文学には「宝物故事」がある。姜彬主編『中国民間文学大辞典』（上海文艺出版社、一九九二）の「得宝故事」の項目には、「勤勞で善良、地道な貧乏人が幸いにも不思議な宝物を手に入れて後、生活を変える。金持ち或いは欲深な人間はこの宝物を取ることができず、たとえ強奪しても、宝物は彼らのために功を奏さず、却って懲罰を被る。」と説明し、また「三件宝物故事」の項目には、「勤勞で善良な貧乏人が三つの宝物を得て、幸福な生活を送る。後に宝物は人に騙し取られて、幸福な生活は壊されるが、自己の知謀を働かせて宝物を奪回し、宝物を騙し取った人間は懲罰を受ける。」と説明する。

「包公案」の中にもこの種の故事作品がある。それは元の武漢臣『包待制智賺生金閣』（『元曲選』）である。『生金閣』劇の内容は、秀才郭成が功名を求め、家宝の「生金閣」を携えて上京し、途中で権貴龐衙内に出会って、分別もなく信用して家宝を献上して殺害され、愛妻と宝物を奪われる。包公は彼の怨霊の訴えを聴き、機知を用いて龐衙内から宝物を奪回し、被害者の仇を討つ。

悪人は懲罰を受けており、この劇は一つの団円劇だと言えるかも知れない。しかし、死者は復活することはなく、悲劇の気分は消えることはない。これは別の元劇についても共通し、死者を復活させる作品は元劇にはない。だが明代には、包公の権能はますます強大化し、成化年間に出版された説唱詞話『張文貴伝』では、包公は宝物を用い

宝物故事から見た「包公案」の作品構造（阿部）

て死者を復活させ、家族に団円をもたらす。これ以後現代に至るまで、包公劇において死者還魂、一家団円の作品が大いに歓迎され、陸統と創作されている。筆者はこの「包公案」の還魂故事劇にこそ庶民の吉祥を喜ぶ感情が反映していると考え次第である。本稿では宝物故事劇の歴史の変容の実態を考察してみたい。

## 二 「包公案」の宝物故事の由来

「包公案」の宝物故事を考察する前に、まず宝物故事の由来について述べておきたい。宝物故事に関しては、宋李昉編『太平広記』に漢代以降の記事が多く記載されている。たとえば、漢劉歆『西京雜記』には、「漢武帝時、西戎獻吉光裘、入水数日不濡、入火不焦。」（漢の武帝の時、西戎国が吉光裘を献上した。それを着て水に入ると数日間濡れず、火に入ると焼けなかった。）「漢武帝時、西戎国獻連環羈、……嘗照十余丈、其光如画。」（漢の武帝の時、西戎国が連環羈を献上した。……いつも十丈余りを照らし、その光は絵のようだった。）「身毒国宝鏡一枚、……照見妖魅。得佩之者、为天神所福。」（身毒国の一枚の宝鏡は、……妖怪を照らし出した。この鏡を佩する者は、天神が庇護した。）がある。

ここに記載されているのは、外国の朝貢した宝物であるが、このほかにも、玉清仙女が杜陵の韋弁に碧瑤杯・紅蕤枕・紫玉函を贈り、胡人が銭数千万で買ったという（唐張説『宣室志』）のように、天界の宝物もある。また敦煌変文の句道興『搜神記』（王重民等編『敦煌變文集』巻八、一九五六）には、「天賜孝子之金、郭巨殺子存母命、遂賜黄金一釜。」（天が孝子に賜る金であり、郭巨は子を殺して母を存命させたので、黄金一釜を賜るのである。）といひ、『舜子變』（同上書巻二）には、継母が舜に井戸を浚えさせた時、「上界帝釈、密降銀錢伍百文、入于井中。」（天界の帝釈天が密かに銀五百文を降らせて、井戸の中に入れた。）というように、天が孝子に金銀を贈るといふ故事がある。

「包公案」の宝物故事はこれらの故事の流れを汲むものと考えられる。たとえば、河北・四股弦『九華山』（張克温口述、『河北戯曲伝統劇本彙編』、一九六〇）には、王桂英が雲南交趾国が献納した日月龍鳳襖・山河地理裙を着

て灯籠見物に出かけ水に入っても濡れなかったことを記し、山東・柳琴戲『珍珠汗衫』（解桂堂口述・何麗校訂、『山東地方戯曲伝統劇目匯編』、一九八七）も同上故事で、夫人が外出する娘劉鳳英に珍珠汗衫を着させるといふのはその類であろう。

その中で特にストーリーとして注目すべき作品は、元の武漢臣の雜劇『包待制智賺生金閣』（『元曲選』）と無名氏の雜劇『包待制智賺三件宝』（『録鬼簿続編』）の二作品である。前述のように、『生金閣』劇では、秀才が宝物を権貴に献上して官職を得ようとするのが述べられる。宝物を献上して官職を得た故事としては、『琴操』『信立怨歌』の、楚の卞和が荆山の璞を玉に献上して陵陽侯に封ぜられたことを想起させる。しかし『韓非子』や『後漢書』などの書物には記載されていない。また董康等編『曲海総目提要』（大東書局、一九二八）巻五『白蛇記』（明鄭国軒）には、龍王が報恩のために書生劉漢卿に夜光珠・蝦鬚簾・珊瑚樹を贈り、李斯に献上して劉が総管の職位を得るといふストーリーに関連して、『太平広記』（巻四〇四、「肅宗朝八宝」）の尼僧真如が天帝から贈られた八宝を肅宗に献上して年号が宝応元年と改号され、刺史と進宝官が昇進し、真如が「宝和大師」といふ称号を授かったことを記して、「献宝得官」が現実にあったという証としている。唐張説『梁四公記』（『太平広記』巻四百十八、龍、震沢洞）にはまた、梁武帝が杰公に謀って東海龍王の宝珠を求め、派遣された羅子春兄弟が奉車都尉・奉朝請の官職を授かったと記す。元劇では「生金閣」は風を受けてひとりで音楽を奏する宝物であり、主人公は朝廷に献上すれば官職を贈られると期待していた。そして作中でも、最後に朝廷は彼に「特賜進士出身、被榮名、使光幽壤。」（特に進士出身の身分を賜り、榮譽を冥界に輝かせた。）という。

庶民は家族の中から一人高官が出て、安穩に生活を送ることを期待したようである。たとえば、明の成化年間に出版された『説唱詞話』『包龍図公案断歪烏盆伝』は元の雜劇『玎玎珰珰盆兒鬼』を継承した作品であるが、元劇では主人公楊国用は商人であるのに対して、『説唱詞話』では主人公楊宗富は科擧受験のため上京する秀才に変わっている。なお『説唱詞話』では主人公を秀才とする話が多く、『包龍図断曹国舅公案伝』の潮州の秀才袁文正、『張文貴伝』の涿州の張文貴、『包龍図断白虎精伝』の出身地不明の沈元華、彼らはいずれも受験のため上京する富家の子弟である。包公自身に至っても『包待制出身伝』という出世故事が作られたほどである。この作品において、

宝物故事から見た「包公案」の作品構造（阿部）

包公は富農包百万の第三子であり、出生時に醜悪な容貌であったため両親に捨てられるが、大嫂に救われて養育され、読書人になるのである。

### 三 宝物故事の構造—吉祥と災禍

元劇以後、「包公案」には多くの宝物故事を演じる作品が出現した。庶民にとって宝物は吉祥であり、善人に幸福をもたらすものなのである。たとえば『釣金龜』全串貫（蒙古車王府藏曲本）では、張義が金龜を釣ったことに對して、母康氏は「孝心感天」（孝心が天を感動させた）と考え、四川胡琴『釣金龜』（四川省劇院所藏南種川劇團口述本底本校勘、『川劇傳統劇本匯編』、一九六三）では、「孟津河的金龜是只有忠孝之人能釣。」（孟津河の金龜は忠孝の人だけが釣れる。）という。

そして「包公案」では、元劇のように、宝物を朝廷に献上して官職或いは「進宝状元」という身分を得るという幸運を願望する話が極端に多い。「包公案」以外にも、明末の俳優顧寛宇作『織錦記』（一名『天仙記』、『曲海総目提要』卷二十五）では、仙女が董永との別れに臨んで龍鳳錦を贈って、朝廷に献上すれば功名を得られると告げ、董永は果たして「進宝状元」に拔擢される。現代の伝統地方劇を見てみると、以下のように多数の作品が見られる。

#### ○甘肅・秦腔『楊文広掛帥』（『甘肅傳統劇目匯編』、一九八三）

書生范敬梅が救った梅鹿は范が難に遭ったのを見て戎双蓮の名を呼び、梅鹿鏡を残して双蓮に范を救わせる。戎母は双蓮を范に嫁がせ、范に梅鹿鏡を贈って科挙を受験させ、もし落第したなら宝鏡を献上して「進宝状元」に封ぜられるよう諭す。

#### ○広西・邕劇『搖錢樹』（白少山発掘・李墨馨校勘、『広西戯曲傳統劇目彙編』、一九六一）

玉帝に罰せられて下界に降りる白花仙に對して、紅花仙は醒酒釵を贈り、緑花仙は搖錢樹と珠寶盆を贈り、蘭花仙は山河地理裙を贈る。白花仙は崔文瑞との別れに臨んで、山河地理裙を贈り、もし朝廷に献上すれば、高官を授けられるであろうと告げる。

○山東・柳琴戲『釣金龜』（『山東地方戲曲傳統劇目匯編』、一九八七）

太白金星李長庚は仁義星（張義）が揚州に転生して状元に及第すると知り、金龜を河中に投じて彼に釣り上げさせる。

○山東・柳琴戲『五長幡』（姫玉周口述・何麗校訂、『山東地方戲曲傳統劇目匯編』、一九八七）

吳迎春は松林で珍珠夜明簾を拾い、もし落第して朝廷に献納すれば「進宝状元」になれると考える。

○山西・北路梆子『天劍除』（侯玉福・張步青口述本、『山西地方戲曲匯編』、一九八一）

南海大士は仙童を遣って党夫人に宝珠を贈る。党夫人は肉屋の李有に救われて李を養子とする。包公は李有の宝珠を仁宗に献上し、仁宗は李有を御弟殿下に封じる。

○安徽・泗州戲『三跨寒橋』（魏玉林・王広元口述本、『泗州戲傳統劇目選集』、一九六一）

仁宗は四顆の宝珠を夢見て捜させる。朱氏は養子の盧文進に避水珠・避火珠・避塵珠・夜明珠の四顆の宝珠を贈る。盧は宝珠を用いて皇后の病気を治療し、西台御史を拜する。

○安徽・泗州戲『鮮花記』（王広元口述本、『安徽省傳統劇目匯編』、一九五八）

龍女敖秀英は姜文學に、東海傲来国の九頂鉄查山の洞門外に五百年に一度開花する金絲茉莉花を贈る。この鮮花を頭上に戴けば、天を飛び、起死回生も可能である。包公は仁宗にこの鮮花を献上し、仁宗は姜文學に「進宝状元」を授ける。

○広西・桂劇『玉仙塔』（龍金勇発掘・陳芳校勘、『広西戲曲傳統劇目彙編』、一九六〇）

太白星は石義に玉仙塔を贈り、これを三度敲けば仙女が出現して歌舞する、朝廷に献納すれば、必ず官職を授けられると告げる。仁宗は石義を駙馬に封じる。

○広西・桂劇『伏魔鞭』（余金瑞発掘・甘棠校勘、『広西戲曲傳統劇目彙編』、一九六〇）

観音は伏魔鞭を王秀蓮に贈る。包公は李文徳が伏魔鞭を献納したことを上奏し、天子は李文徳に「進宝状元」を授ける。

○広西・桂劇『双牡丹』（筱蘭魁発掘・黄槎客校勘、『広西戲曲傳統劇目彙編』、一九六一）

宝物故事から見た「包公案」の作品構造（阿部）

別れに臨んで鯉魚精は劉金に宝珠を贈り、これを朝廷に献納して官職を得るよう諭す。天子は劉金に「進宝状元」を授ける。

○広西・簞劇『双包記』（黄三順発掘・何簡章校勘、『広西戯曲伝統劇目彙編』、一九六一）

鯉魚精は鯉魚珠を張俊に贈る。張俊は鯉魚珠を朝廷に献納して「進宝状元」を授かる。

ところが民間の「得宝故事」「三件宝故事」で悪人が宝物を強奪するように、「包公案」の大部分の作品においても、宝物はそうした災いを招く。『生金閣』はその中の一例だと考えてよい。清初蘇州派の作家朱佐朝の『瑞霓羅』（『曲海総目提要』巻二十七）では、天界斗母宮の瑞霓羅は、人がその中に眠ると、金童・玉女が斗府へ導く。變吉がこれを拾って災禍を避けるために友人陳温古の家に逗留すると、陳の誣告を被って宝物を奪われる。ここでは宝物は吉祥の作用を発揮せず、却って災いを引き起こしているのである。山西・蒲州梆子『瑞羅帳』（『山西地方戯曲資料』、一九五九）では、「它進入王侯之家、使他繁榮、進入百姓之家、使他被牢獄之災禍。」（これが王侯の家に入るとその家を繁榮させるが、庶民の家に入るとその家に牢獄の災いを被らせる。）といい、広西・桂劇『瑞羅帳』（陳忠桃発掘・黄槎客校勘、『広西戯曲伝統劇目彙編』、一九六〇）では、「得了這宝物、有災禍、應該住在千里之遠。」（この宝物を得たら災禍を被るので、千里離れたところに住まなければならない。）という。前掲『天縁記』では、天帝の四女張四姐が三十三天を往来できる鑽天帽、十八層地獄を出入りできる入地鞋、天神・天将を吸い込む撰魂瓶を持ち出して崔文瑞に嫁ぐが、富者王員外の嫉妬を招いて誣告され、張四姐は夫を救うため、大いに東京を騒がす。また清蒙古車王府藏曲本の「西皮腔」『双釘記』では、張義が川で釣った金亀を持って祥符県令の兄張選を訪ねるが、嫂王氏に釘で殺害される。山西・上党落子『九華山』（『山西地方戯曲匯編』、一九八一）では、王屠夫妻が王桂英を絞め殺して、桂英の着用する南方交趾国が献納した日月龍鳳襖と山河地理裙を強奪する。安徽・泗州戯『小鰲山』（王広元口述本、『安徽省伝統劇目彙編』、一九五八）では、閻老柳洪が灰塵と水火から娘金蟬の身を守るために、珍珠汗衫を着させて鰲山を見物させるが、狗肉を売る李保夫妻が宝物を朝廷に献納すれば官職を得られると知り、柳金蟬を絞め殺して宝物を強奪する。山東梆子『避風簪』（張繼愛口述・張彭校訂、『山東地方戯曲伝統劇目匯編』、一九八七）では、北番国王子が宋国へ献納した避風簪・還魂枕を奪回して海棠国と結盟し、宋国との間

に戦争を起こす。山東・平調『無頭案』（『山東地方戯曲伝統劇目彙編』、一九八七）では、靈仙が李克明に贈った游仙枕を表兄白能が強奪する。四川・高腔『白羅帕』（四川省川劇院所藏本校勘、『川劇伝統劇目匯編』、一九五九）では、悪奴江雄が主人の娘の宝物白羅帕を奪って娘の不貞を誣告し、それを用いて戦功を立てて立身出世する。

#### 四 包公の宝物

宝物故事を題材とする「包公案」では、清官包公が登場する。包公は元劇『生金閣』の中で、「白日に現世を裁き、夜間に冥界」を裁く神通力を發揮し、死者に代わって復讐を行った。この死者の復讐という観点から見ると、「包公案」は北斉顔之推『還冤記』などに記載する復讐故事を継承して新たに清官故事を形成したと考えられる。たとえば、『還冤記』の「宋皇后」（『太平広記』卷一一九）では、漢の靈帝が誣告を信じて宋皇后を死に追いやるが、宋皇后が天に訴えると上帝は激怒し、罪は救いがたく、靈帝はやがて崩じたという。このように、死者の復讐は天理にならって初めて行われることであった。しかしながら法治国家では生きた人間による私的な復讐は許されず、もし死者のために復讐を図るとすれば、行政官に訴えることが正当な方法であった。それはたとえば、唐の盧某撰『逸史』（『太平広記』卷一七二）の亡霊が判官に事件を暗示する話にも反映している。この作品では、家で不法に蠱を養う土豪が露見を恐れて県尉包君の妻を殺害するが、妻の亡霊が觀察判官独孤公の夢に現れて事件を暗示し、独孤公はさらに包君の告発を聴いて、土豪を逮捕するという内容である。「包公案」が出現する要素もここにあった。包公は天理を実践する清官であり、死者といえども包公に対して事件を訴えるべきなのである。かくして『生金閣』劇では、包公は殺害者への復讐を死者に代わって行うのである。

これも宝物故事としての一つの円満な結末と言えるであろう。しかし死者は復活することではなく、悲劇的な気分は消えず、決して完全に円満な結末とは言えない。明代になると、包公の権能にたいする庶民の要求は一層強烈になり、成化年間に刊行された「説唱詞話」『張文貴伝』では、ついに宝物を用いて死者を復活させ、一家団円の幸福を与える神通力を有するに至る。

宝物故事から見た「包公案」の作品構造（阿部）



この『張文貴伝』の内容も書生の出世物語である。そのストーリーは、富家の公子張文貴が応試のため上京する途中、太行山で盜賊静山大王趙太保に捕らえられ、心肝を食われそうになるが、大王の娘青蓮公主に見初められて夫婦となり、逃亡を許される。別れに臨んで青蓮は青糸碧玉帯・逍遙無尺瓶・温涼盞という三種の宝物を贈り、もし科擧に落第したら宝物を献上して官職を得よと諭す。この宝物の中で青糸碧玉帯は、死者を復活させ病人を治療する不思議な魔力を持っており、張文貴は不幸にも京都で楊二の経営する旅館に泊まって殺害され、楊二はこの玉帯を用いて皇太后の重病を治し、元帥・諸侯に封ぜられる。張文貴の龍駒馬は嘶いて、玉皇に大雨を降らさせて張文貴の死体を露出させ、死体を背負って開封府へ到る。包公は死体を見て夫人と相談し、危篤を装って皇太后から玉帯を借り、張文貴を復活させる。仁宗は楊二を斬首し、張文貴を元帥に封じ、青蓮公主との結婚を仲介する。

この作品の基本構造は元劇『生金閣』と似ているが、相違するところは宝物の作用である。『生金閣』では単に珍しいだけに過ぎないが、『張文貴伝』では人に生命力を与える魔力を有しており、作中では死者を復活させて高官を得させ、一家に団円をもたらすのである。たとえば明の沈璟の崑曲『桃符記』は、元の鄭廷玉の『包待制智勘後庭花』雑劇を改編した作品であるが、『後庭花』では店小二に殺害された女主人公王翠鸞は復活しないのに対して、『桃符記』では包公が文書を送って城隍に裴青鸞を復活させるよう命じ、城隍が還魂丹を地上に捨て、裴母に拾わせて翠鸞を復活させている。包公はまた劉天義を推挙して翰林院編修とし、男女の結婚を仲介する。<sup>3)</sup>

説唱詞話『包龍圖断趙皇親孫文儀公案伝』でも、包公は城隍に表章を送って、趙皇親に殺害された主人公師馬相を復活させた後、病死を装って趙王に開封府尹の地位を譲ると偽り、趙王の到着を待って捕らえる。

また『曹国舅公案伝』では、主人公袁文正は復活しないが、万暦年間に文林閣から刊行された民間戯曲である弋陽腔の『袁文正還魂記』第二十七出「団円」では、包公は天子に金庫を開いて温涼帽を取り出し、袁文正を還魂させて官職を賜うよう要求している。張庚等主編『中国戯曲通史』（中国戯劇出版社、一九九二）には、「袁文正の還魂と五霸諸侯の加封は、人民の善良な願望の実現であった。」と評する。

清初蘇州派の朱素臣等が創作した『四奇観』劇は現存が確認されない作品であるが、『曲海総目提要』巻二十五の説明によると、「包拯為龍圖閣待制、兼撰開封府事。莅任日、修謝恩表畢、隱几假寐。金甲神示以酒色財氣四事。

及賞、命帶伏陰枕等宝物四種隨任。」(包拯が龍圖閣待制兼開封府尹となり、赴任の日に謝恩表を作成し終わり、机上に仮寝していると、金甲神が酒色財氣の四案を示す。包拯は目が覚めて、伏陰枕など四種の宝物を携えて赴任する。)という内容である。その色案では、包公は自殺した女性に温涼帽を被せて復活させ、財案では、包公は閻羅となり、二人の死者を伏陰枕と赴陰床に横たわらせて霊魂を入れ替わらせる。

程子偉の『雪香園』も現存せず、『曲海総目提要』卷三十二の解説によると、包公は外国が朝貢した温涼帽と回生杖を用いて国戚曹鼎に殺害された劉子進の妻を復活させる。なお『売花宝卷』(宣統元年、華嶺康抄本)も『雪香園』と同一故事を演じており、包公は御庫の中から温涼帽と戮活棒を借用して、劉思進の妻を復活させている。

『瓊林宴』(『曲海総目提要』卷三十五)では、包公は還魂枕を用いて好色な太尉葛登雲に殺害された新状元范仲虞の妻陸玉真を復活させる。

乾隆年間の唐英の『双釘案』(周育徳校点『古柏堂戯曲集』、上海古籍出版社、一九八七)には、貧乏人江芋が荏子が淮河に投じた金亀を釣り上げ、打つと黄金を排出するので、それで祥符県に赴任した兄江芸の代わりに老母を孝養し、後に金亀を持って兄を尋ねて上京する途中、宰相王彦齡の次女の重病を治療して結婚するが、嫂王氏に殺害されて金亀を奪われる。しかし閻羅が「保穀靈丹」を江芋の口の中に入れて死体の腐敗を防ぎ、後に包公が金亀を用いて江芋を復活させて、王の次女との結婚の仲介をする。

小説『万花楼演義』(嘉慶十三年序刊)第五十回では、包公は「先帝の時高麗が入貢した三件の還魂活命寶貝」を用いて、温涼帽を夫人の頭に載せ、還魂枕を首の下に置き、返魂香を身体に載せて、御史沈国清の妻尹氏を復活させ、沈国清が私情によって狄青を誣告したことを証言させる。

民国時代には、『双蝴蝶宝卷』(甲寅年、汝南氏抄本)に、包公は外国が朝貢した温涼帽と還魂珠、瓦活棒を用いて徐子建と侍女雪香を復活させ、罪人白羅山を開封府に招いて罪を白状させる。

現代地方劇の中にも殺害された主人公が復活する内容の劇が創作されている。

浙江婺劇『節義賢』(王井春口述、『浙江戯曲伝統劇目彙編』、一九六二)は、所謂「生死牌」故事であり、元來劉子宗・子明兄弟は復活しないが、この作品では包公が劉子宗の死体を還魂床に寝かせて復活させ、観音が養神珠

宝物故事から見た「包公案」の作品構造(阿部)

を兄に代わって処刑された劉子明の口の中に入れて死体の腐敗を防ぎ、包公が烏台に坐して城隍・土地に命じて劉子明の靈魂を召喚させ、家族に名を呼ばせて復活させる。劉子明は養神珠を朝廷に献納して状元を賜る。

上海・越劇『売花三娘』（張福奎憶述、『伝統劇目匯編』、上海文艺出版社、一九六二）では、包公は夜間に烏台に坐して閻羅天子包となり、獄主靈官に命じて国丈曹章に殺害された張三娘の靈魂を召喚し、その告発を聴いて遺体を発掘し、還陽帯で張氏を復活させる。

上海・越劇『失金釵』（許菊香・屠杏花憶述、『伝統劇目匯編』）では、陳茂生が妻金氏と悪僧李洪春の姦通を疑って金氏を自害させ、後に誤解だと知って復讐を図るが逆に悪僧に殺される。包公は陳母の告発を聴いて悪僧を処刑し、還魂帯を用いて夫妻を復活させる。

福建・莆仙戲『郭華』（『福建戲曲伝統劇目索引』、福建省文化局編印、一九五八）では、包公は西天の如来に会い、郭華と玉英の姻縁を知って甘露水を与えて復活させる。包公は玉英を義女とし、郭華に娶せる。郭華は状元に及第して玉英と結ばれる。

安徽・貴池儺戲『章文頭』（別名『章文選』（王兆乾輯校『安徽貴池儺戲劇本選』、施合鄭基金会、一九九五。『中国戲曲志』安徽卷、一九九三）では、包公は朝廷の温涼帽を借りて、皇親魯王に殺害された秀才章文頭の妻百花小娘を復活させる。

安徽・徽劇『高文举還魂記』（『中国戲曲志』安徽卷）では、土地神が還陽防腐丸を太師温和に殺害された高文举の妻王貞貞の口の中に入れて復活に備える。

山東・羅子戲『錯断顔查散』（『中国戲曲志』山東卷、一九九四）では、包公は顔查散と柳金蟬を復活結縁させる。

## 五 主人公としての包公

『張文貴伝』を除いて、包公は主人公の宝物を借用せず、自分の宝物を使用する。筆者が考えるに、その理由は包公の職能と関係があるようだ。包公が死者を還魂させるのは、あたかも道士の法事と似る。包公は道士とは異なる

るが、実際には道士と同様に神通力を發揮する。度脱劇の主人公として道士が宝物を持つならば、公案劇の主人公として包公が宝物を持つのは当然であろう。

道士の宝物については、唐の陳翰の『異聞集』（『太平広記』卷二三〇）に載せる王度の故事に見える。隋の王度は師陰侯生から古鏡を贈られ、それで老狸や大蛇の正体を照らし出す。この古鏡は「照妖鏡」と言え、包公もこの宝物を用いて妖怪を照らし出している。また敦煌變文『目連緣起』（ペリオ二一九三、王重民等編『敦煌變文集』卷六）で、如来は宝物「十二錫杖」、「七宝之鉢盂」を目連に与え、神通力で地獄に行き母親青提夫人に会わせる。この二つの宝物は冥界に赴く道具である。僧侶にとって錫杖や鉢盂は貴重なものである。包公はこれら僧侶の宝物を用いないが、同様に冥界へ赴くための宝物を持っている。宋元話本『大唐三藏取経詩話』「入大梵天王宮第三」では、天帝が三藏法師に三つの宝物隱形帽・金鑲錫杖・鉢盂を賜い、緊急時に使用させる。三藏法師はこれを用いて危険な場所を通過する。たとえば、「過長坑大蛇嶺第六」では、「法師当把金鑲杖指天宮、大叫、「天王救難。」忽然杖上起五里毫光、射破長坑、須臾便過。」（法師はすぐに金鑲杖で天宮を指し、「天王救いたまえ。」と大声で叫ぶと、忽然杖に五里の毫光が起こり、長坑を射破るや、すぐに通過できた。）という。猴行者もこの宝物を使用し、たとえ「入九龍池処」第七では、「被猴行者隱形帽化作遮天陣、鉢盂盛却万里之水、金鑲錫杖化作一條鉄龍、无日无夜、二边相闘。」（猴行者は隱形帽を遮天陣と化し、鉢盂に万里の水を湛え、金鑲錫杖を一匹の鉄龍と化して、日夜通して戦った。）という。包公は妖怪と戦うことはないため、こうした武器としての宝物は使用しない。「包公案」では、妖怪を捕縛するのは、やはり孫悟空等天将の役割であり、包公は妖怪の正体を調査するに止まる。

また元の呉昌齡の『張天師断風花雪月』劇（『元曲選』）第三折には、張天師が三つの宝物を用いて桂花仙子を逮捕する場面、「祖公留下三件法宝：信香一瓣、雌雄劍二口、降妖印一顆、專管天上天下、三界仙精鬼怪魍魎邪魔。」（祖先が伝えた三つの宝物、信香一瓣、雌雄劍二口、降妖印一顆で、専ら天上天下、三界の仙精鬼怪魍魎邪魔を取り締まる。）という。包公も張天師との共通点を有する。

これらの宝物は天界のものであり、不可思議な魔力を有する。「包公案」においては、明の説唱詞話にはまだこうした宝物は出現しない。たとえば、『仁宗認母伝』では、包公は不孝者の仁宗を処罰するに当たって、宝物を使

用せず、玉皇大帝に上奏して、仁宗を五逆の罪で告訴する。彼は宝物を使用しないが、その行動は天理にかなっており、常に天の支持を得ているのである。『包龍圖断白虎精伝』は、包公が妖怪を退治する話であり、ここでは胥吏が狗血を注いで白虎精を捕らえ、包公は張天師の指示に従って開封府の業鏡を用いて妖怪を照らし、張天師が天蓬尺を手に持って正体を現させる。業鏡は仏教用語で、諸天と地獄において衆生の善悪業を照らし出す鏡である。説唱詞話は敦煌變文と同様、民間仏教の觀念が強く、また包公閻羅説もあって、包公がこの宝物を持つに至ったと考えられるが、以後の故事には業鏡は出現しない。

万曆二十二年に朱氏与耕堂が出版した小説『百家公案』の第三回「訪查除妖狐之怪」、第四十四回「金鯉魚迷人之異」で、包公は照妖鏡を用いて妖怪を照らし出す。また第二十九回「判劉花園除三怪」は『洛陽三怪記』を「包公案」化した作品であるが、ここで包公は以前に張月桂が彼に贈った赴陰床と温涼枕に寝て地府に赴き、三怪の正体を調査する。張月桂なる人物が如何なる人物かについては作品の前後に言及がなく不明である。ただここで包公が初めて自分の宝物を持ち、自由自在に死去して冥界に赴いて事件を調査し、再び還魂して現世に戻るといふ神通力を持つに至ったことは特筆すべきである。なお第五十八回「決戮五鼠鬧東京」でも同様に上帝に会うため死去して冥界に赴くが、ここでは「拯取衣領辺所塗孔雀血謾嚼幾口、拯便死去。」（包拯は襟に塗った孔雀の血を舐めて死去する。）という方法を探っている。また明末清初に出版された小説『龍圖公案』では、十二件の地獄裁判故事を載せており、包公はここでも赴陰床に坐して裁判を行っている。

清の石玉崑が語った『龍圖公案』では、包公は古鏡・古今盆・遊仙枕という三つの宝物を手に入れる。石玉崑の説書を小説化した『龍圖耳録』（謝藍齋抄本、上海古籍出版社排印、一九八〇）によれば、古鏡は第二回、包公が二嫂の侍女秋香に井戸に閉じこめられた時に得たもので、魔よけの作用を持ち、第七回、秋香は鏡面に血を付けてその輝きに驚き、慌てて二嫂の左目を剝り抜いてしまい、精神を狂乱させる。古今盆は第七回、包公の夫人李氏が嫁入り道具として実家から持ってきたもので、第十六回、包公はこれを用いて李宸妃の目を治療する。遊仙枕は第十一回、陶然公という顛癡道人が劉天禄に託して星主（包公）に贈らせたもので、人を夢の中で冥界に送る作用を持ち、第二十七回、包公は「錯戸還魂」案で冥界に赴いて黒紅兩判官に会う。

現代地方劇にも包公の宝物を述べる。

福建・詞明戲『烏盆記』（『福建戲曲傳統劇目選集』、一九六二）では、文昌帝君は包拯が文曲星の転生であり將來出世して七十二件の無頭公案を裁くことを知り、斬妖劍・照魔鏡・還魂丹・生死簿書を贈る。

河南・豫劇『鏢郭槐』（林県大衆劇団述抄、『河南地方戲曲彙編』、一九六三）では、包公は江南の靈仙から贈られた桃木宝剣で火龍を出現させ、不孝者の宋王を罰する。

山東梆子『聞磁州』（張玉河口述・張彭校訂、『山東地方戲曲傳統劇目匯編』、一九八七）では、包公は照妖鏡、捆仙索、斬仙劍で栗精を退治しようとする。

河南・豫劇『下陳州』（馮煥卿・邵千卿口述、『河南省劇目匯編』、一九六三）では、包公は曹皇后を照妖鏡で照らして冥界に帰還させる。

広西・桂劇『双劉全井』（唐仙蝶発掘・王堯校勘、『広西戲曲傳統戲曲劇目彙編』、一九六三）では、包公は照妖鏡で白狗精を照らし出す。

安徽・泗州戲『魚籃記』（『安徽省傳統劇目匯編』、一九五八）では、蟹精が鯉魚精に包公の鑄劍・赤劍・照妖鏡・捆仙索に注意を喚起する。

広西・邕劇『揺錢樹』（白少山発掘・李墨馨校勘、『広西戲曲傳統劇目彙編』、一九六一）では、包公は鉄牌に泊まって妖怪の正体を明かそうとする。

山東・柳琴戲『鉄板橋』（倪志海口述・何麗校訂、『山東地方戲曲傳統劇目匯編』、一九八七）では、包公は貴人・宝物・血氣を見たら動かない串朝馬を一頭持っており、地底まで這って行ってでも死骸を掘り出す。

「包公案」においては、被害者と被害者を救済する包公の二人が主人公であり、主人公たちはそれぞれに宝物を持つこととなった。説唱詞話『張文貴伝』においては、包公の機智が強調され、包公が病死を装って張文貴の宝物を皇太后から借り出すということに描写の重点がある。しかしその後の作品群はこうした包公の機智故事を踏襲せず、彼以前から存在する道士や僧侶の宝物故事を採用していき、包公自身の宝物故事を形成していったと言えよう。なお包公の冥界調査は、唐の張鷟の『朝野僉載』などに記載する生きた人間が冥界裁判を行う故事に由来する。

宝物故事から見た「包公案」の作品構造（阿部）

『朝野叢載』卷二には、「太宗至夜半、上奄然入定。見一人云、『陛下暫合来、還即去也。』帝問、『君是何人？』对曰、『臣是生人、判冥事。』」（太宗が夜半に突然死去すると、一人の者が、「陛下は暫時ご足労いただきますが、またすぐにお帰りなさいます。」と言った。帝が「あなたは誰か。」と問うと、「臣は生きた人間で冥界の裁判を行っています。」と答えた。）と記す。この人物は後に『唐太宗入冥記』（『敦煌變文集』卷二）では「輔陽県尉崔子玉」と称し、元の無名氏の雜劇『崔府君断冤家債主』では「磁州福陽県令崔子玉」と称し、「秉性忠直、半点無私。以此奉上帝勅旨、屢屢判断陰府之事。」（性分は正直で、少しの私心も無いので、上帝の勅旨を奉じて、冥界の判官を務めている。）と述べる。なお『西遊記』第十一回「遊地府太宗還魂」では、「判官崔瑀」と称する。包公も「夜半に冥界を裁く」点ではこの崔府君の流れを汲む判官だと言えるが、しかしその審判は冥界の「或促其年、或墮其後、或損其禄位。」（或いはその寿命を短くし、或いはその跡継ぎを無くし、或いはその地位を削る。）という方法ではなく、あくまで現世の司法官として現実に悪人を裁く点が明確に異なる。<sup>4)</sup>

## 六 結び

以上、民間の宝物故事の観点から「包公案」の宝物故事を解釈してみた。「包公案」の宝物は、書生を出世させ、死者を復活させ、法官を冥界に赴かせる不思議な作用を持っている。「包公案」の主人公は被害者とそれを救済する包公であり、それぞれの立場から宝物故事が創作されたと言える。

書生の出世は庶民の願望であり、その思想は民間年画にも反映している。たとえば、王樹村編『中国民間年画史図録』（上海人民美術出版社、一九九一）には、河南朱仙鎮の清代年画「五子天官」「麒麟送子」「五子奪魁」、陝西鳳翔の「天仙送子」「三元報喜」、江蘇揚州の「連中三元」「早生貴子」、台湾台南の「加官進禄」、河北楊柳青の「双喜臨門」「麒麟送状元」「独占鰲頭」、寧河の「状元及第」、山東濰県の「文武状元」「当朝一品」「喜報三元」などを収載しており、これらには庶民が聡明な子を産んで一家を繁栄させる夢が表現されている。また『曲海総目提要』収録の伝統劇の中には、慶祝をテーマとした作品が多く、その中にも一門の栄光を望む思想が表現されている。

「包公案」の宝物故事において、主人公の復活はハッピーエンドには不可欠のことであったが、それは「包公案」以外の作品においても同様であった。元の関漢卿の雜劇『感天動地竇娥冤』（『元曲選』）では、竇娥は処刑に臨んで、もし刑が執行された後に血が白絹に飛び、六月に雪が降り、日照りが三年続くならば、彼女の冤罪の証明だと天に誓って死ぬ。果たして竇娥の受刑後、天候の異常が生じるが、竇娥はすでに刑死しており、復活することはない。これが明の葉憲祖の伝奇『金鎖記』（『曲海総目提要』卷十八）では、竇娥の処刑以前に雪が降り出し、提刑官が彼女の冤罪を悟って処刑を中止し、後に父によって冤罪が雪がれ、父子は団円するとストーリーを改める。現代の河北梆子『六月雪』もこの改作のストーリーを踏襲する。また明の王玉峰の伝奇『焚香記』は宋元戯文『王魁負桂英』を改めて、王魁が状元に及第して後、金員外が彼の家信を改竄したため、桂英は王魁が丞相韓琦の婿となつたと誤解して自害し、その亡霊が海神に王魁の審判を求めて彼の冤罪が証明され、青牛道人が二人を復活させて、夫妻は団円すると結ぶ。ハッピーエンドは幻想性が強いが、我々はこれらの作品から庶民の吉祥を喜ぶ感情を汲み取ることができるのである。

## 注

- (1) 首都図書館蔵本が一九九一年に北京古籍出版社から刊行され、日本でも早稲田大学等の図書館に蔵される。
- (2) 牧野巽『支那家族研究』（生活社、昭和十九年。後、お茶の水書房、一九八〇年『牧野巽著作集』第二巻収）八「漢代における復讐」、二「復讐に対する法律的禁止と社会的賞賛」、及び牛島典子「復讐における道徳と法」（山口大学人文学部平成十年卒業論文）参照。
- (3) しかし沈璟の作品に対する評価は低く、張庚・郭漢城主編『中国戯曲通史』（中国戯曲出版社、一九九二）には、「沈璟の作品は絶大部分が芸術性に欠ける。」「圧迫された人民群衆の武装を精神上で解除するため、封建秩序を維持し、封建統治を鞏固にしている。」という。
- (4) 小説『龍凶公案』の十二話の地獄裁判などを除く。阿部泰記「『包公案』における亡霊裁判について——「夜判冥」

宝物故事から見た「包公案」の作品構造（阿部）



の意義の変容をめぐって——」（東方学九三、一九九七）参照。

- (5) たとえば、明沈受先『三元記』（卷十八）では「馮商累積陰功、上感帝心、命文曲星降生為商子。」（馮商は陰功を積んだので上帝の心を感動させ、文曲星に投胎させた。）といい、無名氏『三殿元』（卷三十）では、「竇禹鈞積德累行、五男皆貴。」（竇禹鈞は徳を積み善行を重ねたので、五人の息子が皆出世した。）といい、『豊年瑞』（卷四十一）では、「老農時畷、累代積善、天賜双珠、子孫榮顯、夫婦寿登百齡、福祿希有。」（老農の時畷は、累代善を積んだので、天が双珠を賜い、子孫は出世し、夫婦は百歳も長生きし、福祿は希有である。）という。その他、同趣旨の慶祝劇に、無名氏『羣星会』（卷三十五）、無名氏『善慶縁』（卷四十一）、無名氏『全家慶』（卷四十六）、清張大復『天賜貴』（卷四十六）などがある。

- (6) 呉書蔭点校本『焚香記』、中華書局、一九八九。